

**科学研究費助成事業 研究成果報告書**

平成 28 年 6 月 16 日現在

機関番号：13801

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2015

課題番号：25370478

研究課題名(和文) 基本語彙5000及びその使用実態に基づくドイツ語学習文法の構築

研究課題名(英文) Construction of German grammar for learners based on the basic vocabulary 5000 and its actual use

研究代表者

大園 正彦(Ozono, Masahiko)

静岡大学・人文社会科学部・准教授

研究者番号：10294357

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,800,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、(1) 頻度に基づいた日本人学習者のためのドイツ語基本語彙(5000語)を選定し、(2) その頻度調査に基づく初級・中級文法項目の再検討及び新たな文法記述を進めた。また、とりわけ(3) 日本語と表現様式が異なるドイツ語表現に関する頻度調査及びその体系的な研究を推し進めた。その結果、3年間の期間内に6編の論文と3冊の図書(1冊は分担執筆)を刊行することができた。加えて研究成果をホームページ上で公開することも行った。

研究成果の概要(英文)：In this research, (1) I made a frequency-based German basic vocabulary list with 5000 words for Japanese learners, and then (2) I reexamined and revised the grammar descriptions for elementary and intermediate levels on the basis of the usage data for the basic vocabulary. In addition, the German expressions that are different from Japanese ones were empirically and systematically investigated. The results of the present research are published in six articles and three books (one of the books has been written together with other researchers). The result is also available on my personal website.

研究分野：ドイツ語学

キーワード：ドイツ語 基本語彙 コーパス 頻度 学習文法 事態把握

1. 研究開始当初の背景

大規模コーパスのデータを活用し、日本人のための本格的なドイツ語学習を目的とした、本格的なドイツ語文法書は、残念ながら今のところないと言ってよい。もちろん、かつてはヨーロッパの言語研究を幅広く取り入れた相良守峯著『ドイツ文法』(1951)やドイツ語に関する該博な知識に基づく関口文法と言われるものがあった。その後理論的な研究が盛んになるとともに、皮肉なことに、ドイツ語全体を記述するような、本格的なドイツ語文法作成はあまり顧みられなくなったようである。近年では、大規模コーパスに基づくコロケーション研究などが盛んになりつつあるが、それらも本格的なドイツ語文法作成に必要な成果を上げるまでには至っていない。

2. 研究の目的

本研究は、上述のような流れを踏まえ、過去のドイツ語研究の知見をもとに、現在利用可能なコーパスデータを活用し、使用頻度なども導入した、新たな、かつ日本人の本格的なドイツ語学習のためのドイツ語文法を構築することを最終的な目的とする。研究期間内においては、まずは頻度データに基づいた基本語彙の選定から始め、特に初級・中級文法に関係する項目に限定し、本格的ドイツ語文法作成に向けた基礎データを構築することを目指した。具体的目標としては次の3点を設定した。

(1) 頻度に基づいた日本人学習者のための基本語彙 5000 の確定

(2) 基本語彙リスト 5000 とその頻度調査に基づく初級・中級文法の再検討及び新たな文法記述

(3) 日本語と表現様式が異なるドイツ語表現に関する頻度調査及びその体系的記述

3. 研究の方法

(1) 上記目的(1)について、複数の語彙リストを参照し、日本人学習者のための基本語彙 5000 の選定を試みる。それらのリストは大きく、大規模コーパスに基づく頻度語彙リスト(例えばドイツ語研究所のコーパス DeReKo に基づく語彙リスト DeReWo など)、教育的観点から選定された各種教育語彙リスト(例えばゲーテ・インスティトゥートによる Start Deutsch A1 などの学習語彙リスト)、独自調査に基づく語彙リスト(例えば、日本文化をドイツ語で説明しているようなテキストをもとに作成した語彙リスト)に分けられる。独自調査を行うのは、母語話者にとっての頻度が必ずしも日本人にとっての頻度と一致しないことがあるからである(例えば Japan という語はドイツ語圏のコーパスでは必ずしも高頻度ではない)。日本における

ドイツ語教育への応用を考えた場合、日本人のドイツ語使用という観点を加味する必要がある。

(2) 上記目的(2)について、基本語彙内の調査で済むもの(次の、)とコーパス調査が必要なもの(次の、)に区分される。コーパスは、検索機能の充実という点から、主に DeReKo (マンハイム・ドイツ語研究所)と DWDS (ベルリン・ブランデンブルク科学アカデミー)を利用する。意味が関わってくる頻度調査についてはサンプル調査を行っていく。次のような項目が調査対象となる。

基本形の頻度: 特定の文法項目に関わる語の頻度、基本語彙内での意味体系など。

語構成の頻度: 接辞・語基の頻度、競合する形態の頻度など。

語形の頻度: 同音異義語の頻度、競合する変化形の頻度など。

語群の頻度(コロケーション含む): 競合する共起語の頻度、語順の頻度など。

(3) 日本人学習者が自然なドイツ語を使えるようになるためには、最終的に異なる発想の表現を学習する必要がある。その異なる表現形式の傾向を捉えるのに、頻度分析が利用できないかという試みである。日独間で「ずれ」の認められる表現を、頻度の面から調査し、その調査の有効性を検証してみるという作業を行う。研究代表者は、小説とその翻訳を利用して、これまで小規模な日独対照コーパスを地道に構築してきたが、それらが今回の調査で利用できる。

4. 研究成果

(1) 頻度に基づいた日本人学習者のための基本語彙 5000 の確定(目的(1))について、コーパスに基づく頻度語彙リスト、学習的観点から選択された教育語彙リスト、日本人学習者を念頭に置いた独自調査に基づく語彙リストを比較検討、リストの合成を行い、最終的な 5000 語を確定した。本研究で基本語彙と考えるのは、現代ドイツ語の語彙の中で「高い頻度」を示し、「広いジャンル(使用域)」に出現する語である。次の図で言うと、A の部分が中核となる。

		ジャンルの広さ	
		広い ⇔	狭い
頻度数	高い	A	C
	低い	B	D

図1 語彙のあり方  
(千野 1986: 59 による)

つまり、特定の分野でのみ高頻度の語彙は対象とならない。本研究では、複数の大規模コーパスを利用することによって、使用域の問題は解消されるものと考えた。

基本語彙の選定は研究初年度に終わらせたいと考えていたが、2年目にずれ込む形となった。主な理由は、結果的に膨大な手作業による調査・分析が必要となったこと、そして各種語彙リスト間の「ずれ」が当初の予想以上に大きかったことである。とりわけ頻度語彙リストと教育語彙リストの間のずれは大きく、基本語彙選定の難しさを認識するとともに、学習上優先すべき語彙とは何かについて改めて考える機会となった。この結果は、市販の各種単語集などについても再考を迫るものとなる。なお、選定した5000語は次の表に示すように5段階(下位区分を含めると6段階)にレベル分けした。

レベル	語数	語彙レベル
レベル1A	500語	500語レベル
レベル1B	500語	1000語レベル
レベル2	1000語	2000語レベル
レベル3	1000語	3000語レベル
レベル4	1000語	4000語レベル
レベル5	1000語	5000語レベル

表1 レベル設定

作成した最終リストはネット上で公開している(下記5.〔その他〕ホームページ等の項を参照)。また、研究成果の詳細については次の通り論文の形で公表した。まず複数の大規模コーパスに基づいた頻度語彙リストの検討と、頻度語彙リストの合成、およびそこで明らかになった各種問題点について下記論文にまとめた。続いて、頻度語彙リストと教育語彙リストの比較を行うとともに、独自の語彙調査も行い、日本人学習者にとっての基本語彙リストはどうあるべきかという検討を行ったものが下記論文である。最終的に作業全体の概要をまとめ、カバー率などの検証を行い、展望を述べたものが下記論文である。この論文では、固有名詞(人名)についても取り上げた。

(2) 基本語彙の各種頻度調査に基づく初級・中級文法の再検討及び新たな文法記述について、基本語彙選定作業と並行する形で、まず基本単語の各種頻度調査を行った。とりわけ時間を割いたのが、同音異義語の頻度、競合する変化形の頻度などで、数百事例に及ぶ頻度調査を実施した。主に使用したコーパスはDWDSとDeReKoである。蓄積されたデータは、基本語彙を確定する際に利用したほか、今後、教材や辞書を作成する際に基礎データとして直接的・間接的に利用できる。この種のデータは論文の形で発表するには馴染まないが、上手く整理した形でネット上で公開できるかもしれない。どのような形が可能か今後検討したい。なお、基本語彙の各種頻

度調査は、実際問題として際限のない膨大な作業であり、今後も継続的に進めていく予定である。しかしながら、問題の洗い出し、中核部分の調査などは地味ながらも押し進めることができた。この成果の一部は、ドイツ語教材として下記図書とに反映されている。

(3) 日本語と表現様式が異なるドイツ語表現に関する頻度調査及びその体系的記述について、言語化に先行する事態把握のレベルに着目しつつ研究を進めた。空間把握の違いを頻度の観点から論じたものが下記図書である。これは、ある対象をどのように指し示すのかという指示の方策をめぐって、日本語はいわゆる直示(話者を指示の原点として「前に」、「後ろに」のように直接指す)が多用されるのに対し、ドイツ語では参照点指示(「...の前」「...の後ろ」)が多用されるということを実証的に示したものである。また、この空間把握で見られるような日独の相違は、他の様々な領域にも同様の形で見られることが確認できた。簡単に述べるならば、日本語では話者を原点とした「自己中心的」な視座から事態が把握され言語化されるのに対し、ドイツ語では自分自身すら客体化する形で、対象から距離を置いた視座から事態が把握され言語化される傾向が強い(下記論文)。一連の研究成果は、日本人のためのドイツ語文法を作成しようとするならば、単にドイツで出版された文法書を参照するだけでなく、日本語との対照を踏まえた日本人独自の視点が必要とされることを示していると言えるだろう。

<引用文献>

千野栄一『外国語上達法』岩波書店、1986。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計6件)

大園正彦, 構文の適用可能性 日独語の好まれる事態把握との関連において, Sprachwissenschaft Kyoto 査読有, 15号, 2016, 1-22

大園正彦, 間主観性と空間把握, 日本独文学会研究叢書, 査読無, 112号(宮下博幸編: ドイツ語と日本語に現れる空間把握), 2016, 51-65

大園正彦, 日本人学習者のための, 頻度に基づくドイツ語基本単語5000 概要, 検証, 展望, 人文論集, 査読無, 66号(1), 2015, 117-135

[http://ir.lib.shizuoka.ac.jp/bitstream/10297/9112/1/66\\_1-0117.pdf](http://ir.lib.shizuoka.ac.jp/bitstream/10297/9112/1/66_1-0117.pdf)

Masahiko Ozono, "Sprachwissenschaft des Tuns und des Werdens" in ihrer heutigen

Dimension, Japanische Gesellschaft für Germanistik (Hg.): Translation und deutsch-japanische kontrastive Grammatik (Iudicium), 査読有, 2015, 35-48

大園正彦, ドイツ語基本語彙リストの比較, ドイツ文学論集, 査読有, 47号, 2014, 47-61  
[http://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/files/public/36334/20141126041218527458/DoitsuBungakuRonshu\\_47\\_47.pdf](http://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/files/public/36334/20141126041218527458/DoitsuBungakuRonshu_47_47.pdf)

大園正彦, 基本語彙と頻度 実践と課題, 日本独文学会研究叢書, 査読無, 98号 (恒川元行・大園正彦編: コーパス利用に基づくドイツ語研究 幅広いデータ収集と頻度から見直す), 2014, 49-64

[学会発表](計10件)

Masahiko Ozono, Intersubjektivität im Sprachvergleich, Japanisch-deutscher Workshop Linguistik: Die Architektur von Grammatik und Pragmatik im Japanischen und Deutschen, 22.8.2015, München (Germany)

大園正彦, 空間把握と間主観性, 日本独文学会 2015年春季研究発表会シンポジウム, 2015年5月30日, 武蔵大学(東京都・練馬区)

大園正彦, 構文の適用可能性 日独語の好まれる事態把握との関連において, 京都ドイツ語学研究会第86回例会, 2015年5月16日, キャンパスプラザ京都(京都府・京都市)

Masahiko Ozono, Intersubjektivität bei der Raumwahrnehmung, 16. Norddeutsches Linguistisches Kolloquium 2015, 28.3.2015, Hannover (Germany)

大園正彦, 基礎語彙とドイツ語教材, 富山大学人文学部シンポジウム: ドイツ語教育のためのドイツ語研究, 2015年2月21日, 富山大学(富山県・富山市)

Masahiko Ozono, Anwendbarkeit der Konstruktion: Ein deutsch-japanischer Vergleich, Sechste Internationale Konferenz der Deutschen Gesellschaft für Kognitive Linguistik: Constructions & Cognition, 1.10.2014, Erlangen (Germany)

Masahiko Ozono, Vergleiche räumlicher Ausdrücke: Was sich hinter Verschiedenheit versteckt, Humboldt-Kolleg Kyoto 2014: Wie gleich ist, was man vergleich-t? Ein interdisziplinäres Sympo-

sium zu Humanwissenschaften, 2014年3月2日, コーピン京都(京都府・京都市)

大園正彦, ドイツ語基本語彙リストの比較, 第62回日本独文学会中国四国支部研究発表会, 2013年11月2日, 松山大学(愛媛県・松山市)

Masahiko Ozono: "Sprachwissenschaft des Tuns und Werdens" in ihrer heutigen Reichweite, 41. Linguisten-Seminar der Japanischen Gesellschaft für Germanistik, 2013年8月30日, コーピン京都(京都府・京都市)

大園正彦, 基本語彙と頻度 実践と課題, 日本独文学会 2013年春季研究発表会シンポジウム: コーパス利用に基づくドイツ語研究 幅広いデータ収集と頻度から見直す, 2013年5月25日, 東京外国語大学(東京都・府中市)

[図書](計3件)

Akio Ogawa (Hg.), Masahiko Ozono et al., Stauffenburg, Wie *gleich* ist, was man *vergleicht*: Ein interdisziplinäres Symposium zu Humanwissenschaften Ost und West, 2016, 371 (263-271)

大園正彦, 朝日出版社, 総合学習・異文化理解のドイツ語, 2016, 72

大園正彦, 朝日出版社, 異文化理解のための初級ドイツ語文法, 2014, 71

[産業財産権]

出願状況(計0件)

なし

取得状況(計0件)

なし

[その他]

ホームページ等

<http://moz.la.coocan.jp/wortschatz/>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

大園 正彦 (OZONO, Masahiko)

静岡大学・人文社会科学部・准教授

研究者番号: 10294357

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし